

考えることをやめない ～迷い、悩み、決断し、コミットする～

渡部 律子

【決断の難しさ】

本原稿のご依頼を受けたとき、一体何を書けば良いのか、迷った。約半世紀、相談援助の実践、教育、研究をしてきた私は、言いたいことがあまりにも多すぎて、それを短い文字数内にまとめる力量がないと感じた。これはまさに決断すること、絞り込むことの難しさである。ソーシャルワークの世界では、自己決定、意思決定、といった用語を何気なく使っているが、実は、決断することは容易ではない。

【振り返り作業の中で気づく大切なこと】

私は、30歳を目前にしてアメリカの大学院修士課程に入りなおした。1980年代の初頭である。当時ソーシャルワークの基礎理論を担当してくれた教員からは、「クライアントの靴の中に自分の足を入れてみなさい」「どれだけクライアントと対等になろうとしてもすでにソーシャルワーカーとクライアントとの間には力の不均衡がある」と何度も言われ、共感できる力を醸成することの大切さとともに、わかった気になることの危うさをも教えられた。また、アメリカでのソーシャルワークの実践現場では、早い段階で、クライアントの全体像をよりの確につかむアセスメントを行い、それを言語化することを経験させられた。クライアントとの協働作業としての相談面接、理論と実践の間を行き来することの重要性、数えだすと、私にとって大切なことは、絞り込めないほどあることに気づいた。

【考え続けることは専門職としての責務】

冒頭で述べたように決断は難しい。クライアントの人生を左右するかもしれない決断には勇気がいる。しかし、専門職としてのソーシャルワークは、クライアントの語る言葉に耳を傾け、対話し、想像力を働かせ、クライアントが望む生活を思い描き、その実現性を考えていく。もちろん、そこではクライアントの可能性だけでなく、限界にも目を向け、最善の支援法を見つける責務を持っている。時として、思いがけない変化が起き、アセスメントをやり直すことも出てくる。考えることをやめないが、ある時期には、クライアントと一緒に（仮説的に・暫定的に）決めた方向に向けて動き出す。つまり、コミットメントすることが求められる。

【ソーシャルワーカー自身の思考を再検証する】

このようなプロセスをたどる中で、ソーシャルワーカー自身も、自分の思考過程を再検証する必要性に迫られる。まさに考え続けるということである。自分の中にどのような感情がわき起こっているのか、一体何をどのように悩んでいるのか、問題の根底に何があるのか、自由に選択できるならば、どのような方法を取りたいのか、現実的に考えて、自分には何ができるのか、自分にできると思っていることが、さらに情報を得たり、誰かに助けてもらったりすることで変化するのか、という問題プロセスを深く掘り下げ、それを言語化してみることは必要不可欠ではないだろうか。

【今の時代にも変わらず必要なこと】

「短期的な成果、効率化」がもてはやされる風潮の中で、ソーシャルワーカーもその波に乗って、「このような問題を持つクライアントにはこのような支援を」といった流れ作業に陥ってしまいがちかもしれない。「何をグダグダ考えているの。さっさと片づけましょう」といった、周囲の人々からのプレッシャーもあるかもしれない。しかし、世の中が変化しても変えてはならないことがあるはずである。それはソーシャルワーカーがクライアントのために、考え続けることではないだろうか。